

三叉路の赤いポスト

志智

嘉

の 路 叉 三

赤

い
ポ
ス
ト

志 智 嘉

明治42年生 東京大学中国文学科卒業 興亜
院華北連絡部・在北京日本大使館勤務 昭和21
年帰国 現在神戸市立図書館長及び神戸市教育
委員会指導部長 現住所神戸市東灘区本山町岡
本梅の谷 8 電☎8373 主著「レファレンス」
「レファレンス・ワーク」(共著)

定價

目

次

△
一
▽

アスパラ畑	タコの鉢巻	ゆかた	宇治の里	みろくのみしょう	うとまると	山手散策	額田王と飯蛸	春寒	梅花香裡壽新春
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
二七	二四	二三	一九	一六	一四	一二	一八	一五	一三

△
二
▽

民族の意志	愁の街	油煤米麵・百花深処・郷	人と焼酒・鉄獅子胡同・	・老車夫・東富西貴・美	一尺大街	駱駝北京に帰る	月餅	鶯宿梅	・荷花嬌不語・杏仁豆腐	・什剎海・香片・荷風	何日君再来	北京暮色	花ざくろ	老樹の陰	ゆあん・しゃお	開市大吉
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
一五					一三	一四	一六	一三	一三	一三	一三	一六	一三	一三	一六	一三

盗唇	三
傍若無佛	三
ユツカの駅	三七
葉雞頭	四〇
すかたん会話	四四
嵯峨野晚秋	四六
櫻わくら葉	五二
桂とめざし	五五
淡路十二月	五七
モンマルトルの朝	七〇
カメラの銅像	七三
三叉路の赤いポスト	七五
森の中のかがり火	八二
ロスの公園	八六

《三》

漢奸	一五
見知らぬ乗客	一五
唐さんの包子	一五
金色の薔	一七

おあいさん	一七
頼もしき女将	一九
夫婦善哉	一九
碁きち迷々伝	二〇
・重役と与力・伊藤安・	
上田村長・怪力和尚・大	
久保彦左・中野大明神・	
源助爺・雨はん・覆面子	



梅花香裡壽新春

毎年、十二月になってちらちらと気にかかるのが、どんな年賀状にしようかということである。お年玉つき年賀はがきに、型の如く謹賀新年と書いて済ませばそれでいいようなものの、それではあんまり曲がないと考えているうちに、日が経って、とどのつまり、型の如くになってしまふ。

旧臘、こんどこそと思って、あれこれ思案をしたが、たいした名案は出ずじまい。仕方なく、中国の春聯から手頃なものを引用することにした。春聯というのは、中国の正月に行なわれる門飾りで、真赤な紙に墨か金泥で目出度い対句を書き、それを門の両側の柱に貼るのである。門飾りはその他にもあるが春聯は省くわけには行かない。

さて、その春聯の中からよい文句を拾って、謹賀新年の代りにしようと思いつき、さてどんな文句があるかと、頭の中のカード箱を引っくり返しては見したが、どれもこれもインクがうすくなって読み取れないのである。ただ一つ

爆竹声中辞旧歲

梅花香裡報新春

というのがあるが、この文句はこれまでも別の所で使ったことがあるので、何か外に思ったが

どうしても記憶が蘇らない。仕方がないからこの対句の後の半分を使うことにし、一字替えて梅花香裡寿新春とした。この七字を赤字、名前を黒字で印刷すると、ちょっといけるじゃないかと思つたのである。

ところで、人間の記憶ほど当にできないものはないとはかねがね思つてはいたものの、たくさん憶えていた春聯の中からこれ一つしか思い出せないとは、何んたることかと悲しくなつた。中国にいたときは春聯に使う対句ばかりを集めた本を持っていたのであるが、引揚のとき他の多くの本と共にそれを人にやってしまったのである。こんどもあの本があればなあとつくづく本の有難さを思ひ、どんな本でもおろそかにはできないものだとしみた——などと書く図書館屋らしくなつてしまふが、春聯というものはいいもので、近頃門松の代りに、印刷した門松をちよいちよい見かけるが、あんなものより、よほど気の利いた、正月らしいものだが、考えてみると漢文の読める人がだんだん少なくなつたのだから、日本じゃ所詮駄目かも知れん。

先日どこかのテレビの放送に「虚礼虚心」という題の座談会があつた。それに出席した奥野信太郎さんも言っていたが、虚礼の虚と、虚心の虚を、同じ字だから同じ意味だと考えて、こんな題をつけ、平然とマス・コミとやらが行なわれるほど、国語が軽視される国じゃないか、梅花香裡寿新春なんて書いたとて、寿を「ことほぐ」と読んでくれる人がどれほどいるか——と口うるさき友人に言われた。

(三十三年十二月)

春 寒

敷布団を片付けようとしたところ、枕の下に、受験雑誌が一冊あった。

同室の患者の話では、つい一カ月ほど前までは、夜十一時からのラジオ受験講座をトランジスターで時々聞いていたという。

トランジスターは入院当時から持っていたものだが、受験雑誌は、「決して見ないから持って来て頂戴」とせがんで、持って来させたものである。この子の母は、いずれ大学を受験する友人にでもやるのだろうと思って持って行ったという。

日本詞華集は入院中ずっと枕元においてあった。眼底出血で眼がかすみ出してから、時々これを見ていたようである。この本は活字も大きいし、それに短歌や詩は、憶えやすいから、永く本を見つづける必要もない。国文科志望であったから、少しでもその方面の知識を得ておきたかったのである。

慢性腎炎で初め入院したのは中学三年の二学期末。三学期は登校しないまま卒業させてもらって十カ月間入院した。退院後、病状が安定したようなので、本人の希望もあって、ホーム・ドクターと相談の上、高校へやることにした。内申だけで、ある女子高校へ入れてもらったのである。

一年生、二年生のときは、週に半分くらい、それも午前中だけ学校へ行った。身体の場合は退院当時とは大差がなかった。良くもならなければ、甚だしく悪くなる様子もなかった。「少々勉強しても別状がない」これが不幸への第一歩であった。こんな出席状況だったのに学課の方は割合成績がよかった。これなら勉強すれば四年制の大学に入れるかも知れないと考えようになった。不幸への第二歩である。

三年生になり、桜が若葉に変わる頃から、学校に行く日がふえ、一日の勉強時間がだんだん長くなって行った。それに比例して、母親とのいさかいははげしくなった。母親の言い分は、あなたの病気は食餌療法と安静しかない。極端に制約された食事を補うための安静なのに、そんなに勉強してはとも身体がもたないから、ほどほどにしてくれと言う。娘は自分の身体は自分が一番よく知っているから干渉しないでくれという。こんないさかいである。

それに、ひびの入った身体だから、将来は独立の生計が営めるようにしなければならない。その為にはどうしても四年制の大学へ入らねばならぬ。大学に行きたいのは一つはそういう目的なのだと話していたようだ。

夏も盛りが過ぎ、風が涼しくなると共に、勉強も次第にはげしくなっていた。学校から帰ってからも、夕食時しばらく休むだけで、たいいてい十二時過ぎまでやっていた。

毎日学校から帰って来ると相当疲れていたようであるが、それを知られまいとしている様子かは

つきりと見えていた。時々ひどく頭痛がした。腎臓から来る高血圧が原因である。尿中の蛋白の量もだんだん多くなつて行つた。

十一月中旬、医師から再度の入院を勧められた。

入院後、病状は悪化の一途をたどつた。正月過ぎ十日間ほど非常に元氣に見えたが、これもほんの一時的なものに過ぎなかつた。二月十三日夜、悶え苦しみながら死んだ。意識は最後まではつきりしていた。もう一度回復して勉強する希望を持ちつづけていた。

(三十六年二月)

額田王と飯蛸

冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし

鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど

万葉随一の女流歌人額田王は、春をこのように歌い上げながらも、

秋山の 木の葉を見ては 黄葉もみぢをば 取りてそしのぶ 青きをば 置きてそ歎く

そこし恨めし 秋山われは

と、秋の方に軍配をあげたのであるが、彼女はひょっとすると、相当な肥満体であつて、従つて暑がりだったのじやなかうか。

どちらかといえは細長い私などは寒がりであるから、秋のよさは十分承知しながらも、その次に来る冬が恐ろしいために、どうしても春をひいきにせざるをえないのだ。

もっとも、春といつても、桜咲き乱れ、その下で、人々が落花狼藉、酒をのみ、弁当を食ひ、新聞紙を所きらわず捨て散らし、中には前をひろげて軽犯罪を天下御免のごとくやらかす。そんな場所には、もちろんこちらから願ひ下げたい。

二月堂のお水取りの終る前後から、桜のちらほらはこるびかけるころまで、この二十日あまりが

年間を通じて私の最も好きなシーズンである。

きびしかった寒さも、薄皮をはぐように、少しずつ弱まってくる。洗面の水は依然冷たくとも、窓から外を見ると、隣の庭の木々が何となく活気づいてきているし、思案所（昔の人はうまいことをいうものだ）にはいつていると、きまって裏山で鶯が鳴く。

「ああ、いよいよ春だなあ」

そして私の思いは、はるか淡路の海や野をさまようのである。

「飯蛸^{いいたこ}が食べたい」

飯のいっぱいしまった飯蛸。寒い西風に耐えてきたワケギと酢みそあえをするのである。何の変哲もないものだが、君笑うことなかれ、これが真っ先に脳裏に浮かぶのである。

カレイの中でも、このころになるとアマガレイ・ヒラメがうまくなることはいうまでもないが、細作りにしてよし、煮付けてよし、ことに私は、少々貧乏くさいが、メイタガレイの大きなのを丸っぽのまま煮付けたのが好きだ。何しろ生きているやつを、料理するやとたんに鍋の中にほうり込むのであるから、新しいことこのうえはない。身ははね上がるように骨から離れる。それを大きくつまみ上げる。思うだに睡かにじみ出る思いなのだ。大きい身をあらかじめ食ってしまったあと、ヒレのほとりに米つぶを並べたように並んでいる小さい身を入念にあさるのである。私の亡父は生前、食卓でよく「骨辺の肉・暁の眠り」と言ったが、カレイの骨辺の肉はあらゆる骨辺の肉中の王者で

あろう。

アブラメ・オコゼもまたうまい。オコゼなどあのおっかない顔でいて、どうしてああもうまいのだろう。

海ばかりではない。野にも畑にも春らしいものが競い出る。フキノトウはいきさかたけたが、ツクシ・ウド・木の芽・松露もぼつぼつ出はじめる。エンドウ・フキも大きくなる。タケノコもあわてものはもう頭を出しはじめる。

とにもかくにも、春も弥生は半ば過ぎ。思案所における私の想念はふるさとの古ぼけた台所をひょうひょうとさまよう。

「紫のにはえる君」ではあっても、額田王はどだいイイダコなど食ったことはないであろう。

(三十七年二月)

山手散策

「関帝廟ってのは関羽を祀ってあるんでしょうね」

「さよう」

「神さんですか、仏さんですか」

「さあ、どちらですか、私にもよく判らんが、神さんか仏さんか、どちらかに分けようというのがそもそも無理じゃないのかしら」

いつもこんな質問が出て、いつもこんな返辟をする。

あの赤や金に塗り立てた中国式の建物と、廟内の模様が、他所から来た人を驚ろかすらしい。そして外の通りに出ると、「福建同郷会館」という向い側の看板が目について、客はたいてい、

「なるほど、神戸らしい」

神戸の図書館へは、よくよその図書館から視察に来る。その多くはこの館の相談事務を見学することを目的としているが、そういう来客に神戸の街を知ってもらうために、私が案内する道順は大体きまっている。

まず大倉山から関帝廟へ行って、中華同文学校の東の道を北に突当り、東に折れて相楽園の北沿